サンプル問題から考える「令和７年度共通テスト」に向けた教育実践例

八木橋 朋弥

令和４年度の高等学校入学者から、平成30年３月に告示された新学習指導要領により学ぶことになる。これに対応し、大学入学共通テストも令和７年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト（以下「令和７年度共通テスト」という）は、新学習指導要領に対応した試験となる。そこで、「令和７年度共通テスト」の出題科目である『歴史総合、日本史探究』『歴史総合、世界史探究』『地理総合、歴史総合、公共』について、現在公表されているサンプル問題や共通テストの内容を分析しながら、その対策について勤務校の教育実践例をあげつつ述べていく。

サンプル問題の分析について

令和３年３月24日に、「地理総合」「歴史総合」「公共」のサンプル問題が公表された。ここでは、個々の詳細な分析ではなく、サンプル問題全体の特色を具体的に提示し、共通テストの内容との比較も加えながら分析していく。なお、サンプル問題は大学入試センターのホームページからダウンロードできるので確認してほしい。

いずれのサンプル問題も、図版や資料などの情報量は共通テストよりも多かった。「地理総合」では、多様な場面設定を用いて、多くの図表や写真資料を提示しながら思考力・判断力をはかる出題があった。「歴史総合」も「地理総合」と同様に、多様な資料や図版などを利用した設問があり、とくに歴史的資料に対する解釈や読解力が問われていたことが特徴的であった。「公共」では、資料を複数読む必要がある設問や計算が必要な設問があった。すべてのサンプル問題で共通していることは、知識だけで解答できるような出題ではなく、知識を活用し考察することが求められているということである。

たとえば、「歴史総合」のサンプル問題では、「資本主義」や「自由」といった概念について資料をもとに考察する設問があった。こうした設問は知識だけでは解答できない。概念を可視化して思考すること、ただ知識を覚えるのではなく、知識を活用して考察を加えることが重要である。これは、「地理総合」における防災学習の出題や、「公共」における模擬裁判のような体験に準じた場面設定がなされた出題からもうかがえる。「令和７年度共通テスト」もサンプル問題にそったかたちで出題されるだろう。ここから考えられる授業展開は、資料をもとに生徒が能動的に自分なりの意見を表現する授業である。知識習得をおろそかにせず、それを前提として「思考力・判断力・表現力」を育成する授業を展開することが今後ますます求められていくであろう。

「思考力・判断力・表現力」の育成について

では、今回のサンプル問題で特徴的な、「思考力・判断力・表現力」を育成するには具体的にどのような授業を展開すればよいだろうか。

「思考力・判断力・表現力」を育成するためには、用語を覚えさせるではなく、用語相互のつながりを認識し理解させることが重要である。事象相互の関連性や変化などについて、「なぜなのか？」「どのような変化が生じたのか？」と生徒自身が考察

し、「考えて理解・判断する」ことが「思考力・判断力」の育成に直結していく。そして、そのように考察したことを、理由や根拠にもとづきまとめる機会を取り入れ、「表現力」を育成する。暗記におちいらず、「自分の頭で考える」ことで「結果として覚えている」状態が望ましい。

「思考力・判断力・表現力」育成のための教育実践例

授業の展開にあたっては、どの科目においても知識の習得や確認をする場面はある程度必要になるだろうが、生徒が教員の話を聞きノートをとる形式だけで年間を通じて授業を展開することはできるだけ避けたい。

勤務校の授業実践例を具体的にあげて考えていこう。

世界史Bの授業担当者として意識していることは、限られた授業時数のなかで、①世界史の興味関心を引き出し、②世界史の学習を通じて論理的に理解した歴史上の様々な事象を現代の世界や自分自身に有機的に結びつけ、③受験に対応することである。この3つの要素をふまえ、「思考力・判断力・表現力」の育成のために講じる「手立て」について述べていく。

「手立て」1　授業編

――生徒の心に残る（＝心を揺さぶる）3つのサプライズ

サンプル問題の特色からみえる知識を活用し考察する力の育成のための手立てとして、3つのサプライズについて紹介する。

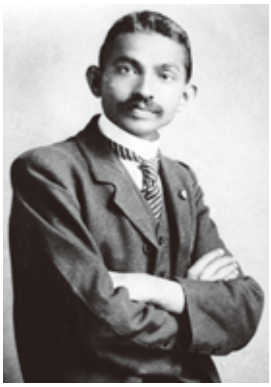
> 3つのサプライズ
> ①えっ！　本当！?
> ②へぇーそうなんだ！
> ③だからこうなるんだ！

①「えっ！　本当！?」は、生徒の認識の「逆」を提示することで、生徒の世界史に関する興味関心を引き出す。

【具体例】インドにおける民族運動の展開について

資料1（**巻頭図版上**）を提示する。

> **発問**　この人物はだれか？　その特徴は何か？
> ダイアローグ！！



資料1

資料2

近くの生徒同士で話し合いの時間を1～2分程度設ける。その後、全体に再度発問し生徒から答えを聞く。「スーツを着ている」「ネクタイを締めている」以外は、「だれかわからない」「見当もつかない」といった生徒の答えがほとんどである。そこで、**資料2**（**巻頭図版下**）を提示する。この段階で、授業の雰囲気が変化する。**資料1**と**資料2**が同一人物であることを認識し、生徒の頭のなかで「えっ！　本当！?」となる。そこでつぎの発問をする。

> **発問**　この人物はだれか？　その特徴は何か？
> **資料1**との違いとその理由について考えてみよう！

生徒どうしの話し合いは**資料1**の提示の時よりも活発になる。生徒の興味関心は、「自分たちが知っているガンディーは、どうしてスーツにネクタイをしていたのだろう？」ということに移っている。話し合いの様子をみながら、適宜ヒントを示していく。

ヒント　**資料１**は、南アフリカにいた頃のガンディーである。

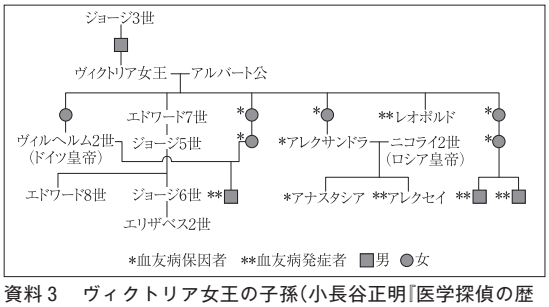
生徒によっては、南アフリカはイギリスの自治領であることから、イギリスのライフスタイルをガンディーが受け入れていたことに気がつく。気がついた生徒からまわりに説明し共有するようにうながす。

ヒント　ガンディーは南アフリカ唯一のインド人弁護士である。

スーツにネクタイをしてイギリスのライフスタイルを受け入れたガンディーが、イギリスの法律を使って弁護士をしていたことを生徒に伝える。そして、**資料２**のガンディーは、イギリスのライフスタイルを捨て去り、インド独立をめざすガンディーである。つまり、法律上はイギリスに従っていても、インド人であるというアイデンティティから、完全にふっ切れたガンディーの姿がみてとれることを生徒が理解したうえで、インドの民族運動についての授業を展開する。たった２つの資料であるが、生徒のガンディーに対する認識の逆を提示することで、「えっ！　本当！?」と、生徒の世界史に対する興味関心を引き出すことができると考える。

②「へぇーそうなんだ！」は、資料の読み取りなどを通じて、生徒の世界史に対する理解を引き出す。

【具体例】第一次世界大戦とロシア革命について



資料３　ヴィクトリア女王の子孫（小長谷正明『医学探偵の歴史事件簿』〈岩波書店、2014年〉p.151より作成）

第一次世界大戦とロシア革命の授業展開において、ロマノフ朝の滅亡を扱った際に家系図（**資料３**）を提示する。

発問　この資料から読み取れることは何か？まわりの人とダイアローグ!!

血友病の発症例やその特徴について生徒に示しつつ、生徒どうしの話し合いの様子を見守る。第一次世界大戦の構図を振り返るよう指示を出すと授業の様子が変化する。生徒がドイツ皇帝ヴィルヘルム２世、イギリス国王ジョージ６世、そしてロシア皇帝ニコライ２世に着目できれば、第一次世界大戦が親族どうしの戦争であったことに気がつく。この血友病保持者の家系図を読み取ることで、第一次世界大戦とロシア革命について、意外なアプローチで生徒の「へぇーそうなんだ！」という理解を引き出すことができる。

③「だからこうなるんだ！」は、複数の資料を組み合わせて生徒に提示し、その分析を通じて生徒の思考や判断をはぐくむ。

【具体例】ヴェルサイユ体制下の欧米諸国について

資料４～６を提示する。

第１条　締結国ハ、国際紛争解決ノ為戦争ニ訴フルコトヲ非トシ、且、其ノ相互関係ニ於テ国家ノ政策ノ手段トシテ戦争ヲ放棄スルコトヲ、其ノ各自ノ人民ノ名ニ於テ厳粛ニ宣言ス

資料４　「不戦条約」（1928年8月調印）（外務省ウェブサイト〈https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/treaty/pdfs/B-S38-P1-197.pdf〉〈最終閲覧日：2021年11月1日〉、一部新字体に改め、読点を付した）　※授業では名称は示さない

第１条　大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第13条　天皇ハ戦ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ条約ヲ締結ス

資料５　「大日本帝国憲法」（1889年2月11日公布）（『官報』、一部新字体に改めた）

帝国政府ハ千九百二十八年八月二十七日巴里ニ於テ署名セラレタル戦争抛棄ニ関スル条約第一条中ノ「其ノ各自ノ人民ノ名ニ於イテ」ナル字句ハ帝国憲法ノ条章ヨリ観テ日本国ニ限リ適用ナキモノト了解スルコトヲ宣言ス

資料６　「帝国政府宣言書」（1929年6月27日）（外務省ウェブサイト〈https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/treaty/pdfs/B-S38-P1-197.pdf〉〈最終閲覧日：2021年11月1日〉、一部新字体に改めた）

第一次世界大戦後の国際協調体制の授業において、**資料４**を提示する。

発問　**資料４**の内容を読解し、周辺で答え合わせをしましょう。

公文書の内容を読解しつつ、生徒どうしで答え合わせをする時間を設ける。**資料４**が読解できたところで、つぎの発問に移る。

発問　**資料４の公文書の名称は何か？**

「国際紛争解決ノ為戦争ニ訴フルコトヲ非トシ」の部分や「其ノ相互関係ニ於テ国家ノ政策ノ手段トシテ戦争ヲ放棄スルコト」の部分から、不戦条約であることを近くの生徒との話し合いでたどり着く。ここで、不戦条約に至る背景や当時の状況などを復習するよう声をかけてみてもよい。

発問　日本では、その批准にあたり**資料４**の内容のある部分が**資料５**に反するとして問題視されました。では、**資料４**のどの部分が**資料５**の何に反するか、その理由とともに意見交換をしましょう。ダイアローグ！！

複数の資料を読み比べる時間を取り、読み取った内容を周辺の生徒どうしで共有する。ここで大切なのは、不戦条約の条文のなかにある「人民ノ名ニ於テ」の部分に生徒どうしで気がつくかどうかである。気がつく場合はそのまま話し合いを続け、難しいようであれば、大日本帝国憲法の第１条・第13条を読解させ、その内容と不戦条約の内容を比較するように指示する。

不戦条約の「人民ノ名ニ於テ」の字句が、大日本帝国憲法の「天皇ハ戦ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ条約ヲ締結ス」の部分に反することに気がつけば、**資料６**の「帝国政府宣言書」を出した理由がみえ、「だからこうなるんだ！」と生徒は理解するだろう。最後に、当時の田中義一内閣が、1929年６月27日にこれは「帝国憲法ノ条章ヨリ観テ日本語ニ限リ適用ナキモノト了解スル」と宣言して落着したことを補足することにより、生徒の理解がさらに深まることだろう。

以上、３つのサプライズについて、勤務校での授業実践を例に述べた。重要視しているのは生徒どうしのざっくばらんなダイアローグ（対話）である。間違うことや、わからないことは決して恥ではない。「人前で間違うのは恥ずかしい」という柵から脱却し、自由に発言できる授業の場をつねにつくりたいと日頃から考えている。また、生徒の興味関心を引き出す資料を教員側がどれだけ提示できるかということも重要である。そのためにも、定期的に書店に足を運び新書やその他書籍に触れる、同僚教員との情報交換を通じて授業に活用できる図版・グラフ・データなど各種資料がないか考える、最新の歴史研究の動向がどのようになっているのか各種研究会などに参加するなど、授業改善に関するアンテナをつねに張っておく必要がある。

「手立て」2　定期テスト編
――授業と定期テストに関連性をもたせる

授業における実践例をこれまで述べたが、たとえ授業が知識習得偏重ではなくなったとしても、定期考査の内容が空欄補充や単純な正誤判定問題など、授業内容を確認するだけの安易なものであれば、「社会科＝考える科目である」とはならない。授業で学んだことをふまえ、各種資料を参照しつつ用語や事象に対する理解ができているか否かや、

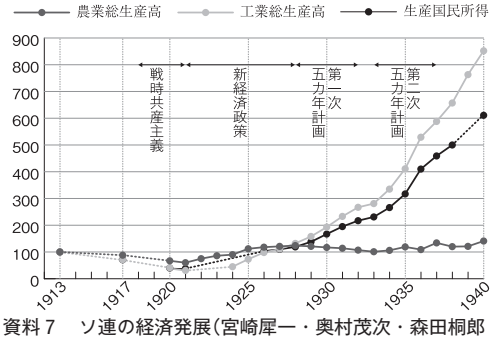
思考ができているかどうかを問う問題をなるべく多く出題したい。

【具体例①】定期テスト問題　中国における民族運動

> 周樹人はあるペンネームで多くの短編小説を書いた。彼は医学を志し、仙台医学専門学校(現在の東北大学医学部)に留学した経験をもつ。
>
> 仙台における彼の苦悩などは、『藤野先生』を読んでみるとよい。帰国後、彼は医学から文学へと歩みを変えた。そして、『新青年』にペンネームで『狂人日記』などの短編小説を発表した。そこには、この文学革命の特徴を表す文体が採用されていた。彼が書いた文章の形式はどのようなものであったか。漢字２文字で答えなさい。

魯迅が解答となる問題にみえるが、文学革命の特徴を漢字２文字で解答する問題である。答えは「白話」である。従来の形式美にとらわれた文章ではなく、一般民衆が話す(使用する)言葉を文学のなかに取り入れたことを問うている。

【具体例②】定期テスト問題　ソ連の発展

> つぎのグラフ(**資料７**)はソ連の工業総生産高・農業総生産高・生産国民所得について、1913年を指標とした推移を示したものである。このグラフに関する内容と歴史的事実に誤りのあるものを一つ選びなさい。
>
> 
>
> 資料７　ソ連の経済発展(宮崎犀一・奥村茂次・森田桐郎編『近代国際経済要覧』〈東京大学出版会、1981年〉p.243より作成)
>
> ①　戦時共産主義の時期は、生産国民所得と農業総生産高双方とも低下が著(いちじる)しく、多数の餓死者までもが出るなどした。
> ②　新経済政策の時期は、国有化が強められるなか、工業総生産と農業総生産の双方とも、ほとんど発展することはなかった。
> ③　第１次五カ年計画の時期は、重工業を中心とした工業総生産が飛躍的に発展し、それにともない生産国民所得も向上した。
> ④　第１次五カ年計画の時期は、コルホーズやソフホーズへの集団化が強行されたこともあり、農業総生産は横ばいか、もしくは低下した。

授業内容をふまえて、初見のグラフを読み取る問題である。②が誤りである。国有化が強められたのは戦時共産主義の時期。このように、初見の資料について、学習した知識を活用して取り組む出題も、今後ますます必要となるだろう。

「最後に」――まとめに代えて

サンプル問題や共通テストからわかるように、知識習得をおろそかにせず、それを前提として「思考力・判断力・表現力」を育成することが私たちに求められている。生徒を能動的に考察させるために、授業と定期テスト、そして定期テストの解説等を通じて、生徒が一貫して「自分の頭で考える」状態をめざしていきたい。そのためにも、生徒の知的好奇心をくすぐる数多くの資料をつねに提示する授業実践を継続しなければならない。複数の解釈や解答が出る場面はむしろ、物事を二者択一ではかることが難しい現代社会の考察によい機会となる。社会事象に関する理解とそれにもとづく知識をもとに、生徒が「考え理解し、判断する」授業と定期考査を通じた教育の実践を継続することが、「令和７年度共通テスト」に向けての対策となるであろう。

(やぎはし・ともや／東京都立立川高等学校教諭)